

高等学校「国語Ⅰ・Ⅱ」教科書における 〔言語事項〕に関する記述の問題点

武 山 隆 昭

はじめに

現行「高等学校学習指導要領」は、昭和五三年八月三十日に告示され、昭和五七年四月の入学生から学年進んで実施され今日に至っている。新課程で教育を受けた生徒たちが、現在大学二年生になっており、そろそろ大学側から現行教育課程について発言するべき時になっている。しかも、次の学習指導要領改訂のための教育課程審議会の審議が後半に入っている現在、さまざまな形で問題点の指摘や提言のなされることが必要である。本稿は、本誌前号に掲載の「中学校国語教科書における〔言語事項〕に関する記述の問題点」という拙稿（注）の続編であり、中・高の比較をしながら高校教科書を論じ、国語科教育改善のためにささやかな提言をするものである。

現行学習指導要領は、「ゆとり」と「教材の精選」という語句に象徴されるように、高校への進学率の高まりによって生じた生徒の多様化に対応することが眼目となつてゐるためか、必修と準必修の「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」の教科書は、

以前の「現代国語」「古典Ⅰ乙」のそれと比べて、「中味が薄くなった」「くい足りない」と言った声が現場から聞かれる。特に、古典の教材が貧弱で、いわゆる有名進学校では、「国語Ⅰ」の教科書は現代文だけを扱い、古典は別のテキスト（「古典」の検定教科書であったり、副教材用のテキストであったりする）を使っているのが現状である。こうした現場からの声を集約して、教科書出版社も改訂時に手直しを行ってきているが、四分の一という制約もあり、十分とはいかないのが実情である。右のような声の出ってくる一番の原因は、「国語Ⅰ」の標準単位数を四と定めたことにある。したがって、教科書は四単位の頁数に制限をされ、その中の工夫を競うことになる。さらに、「国語Ⅰ」は高校一年生用であると考えずに中学四年生用と考えて教科書を作れ。」とか、「表現を重視するように。」といった文部省の指導が強力になされたため、各社とも教材の平易化と表現に関する叙述にかなりの頁数を割くといった編集方針で臨んだ。これに対して、現場では普通科の場合、国語科に一年五ないし六、二年六ないし七単位を割りあてているのが一般的で、一年生の場合「国語Ⅰ」だけであるから、当然時間の方が余ってしまうことになる。（もちろん、教科書に載っているすべての教材候補を全部丁寧^{注2}に扱えば、四単位の教科書でも六単位は必要となるだろう。しかし、現実には、さらりと読みながすだけのもの、全く扱わないものもある。）稿者も、現行「国語Ⅰ・Ⅱ」教科書の古文を見て、あまりに総花的なのに驚いた。『竹取物語』では、かぐや姫の誕生と昇天の場面のみ、『土佐日記』は、門出と途中の一箇所、『枕草子』は、春はあけぼのの他に三段ほど、『方丈記』は巻頭と養和の飢饉の一部、といった具合で、これではそれぞれの作品の特徴を生徒に知らしめる事は到底無理である。教師が補助教材プリントで補うか、別のテキストを用いるかせざるを得ない教科書の実態なのである。採り上げる作品の数は少なくとも、採り上げた作品についてはある程度の分量を掲げ、大学生になってから、高校時代にどんな作品を学んだか名前も覚えていない、名称だけは覚えていても内容についてほとんど説明ができないといった、印象の薄い古典教育になるのを防ぎたいも

のである。

それでも古典教材の場合は、担当教師さえしっかりしていれば、補うことが比較的容易であるから、修復可能な分野だと言えようが、「言語事項」の方は、「文法」を除いてほとんど副教材もなく、大学入試にあまり出ないこともあつて、教師がプリントで補うことも皆無に近いのが実情のようで、それだけ教科書の記述が重要になってくるのである。

昭和五十一年十二月十八日の教育課程審議会答申の中で、国語について、改善の基本方針に「言語の教育としての立場を一層明確にし」とあるのを受けて、指導要領では「A表現」「B理解」の二領域の基礎的な事項として「言語事項」を設定したのである。前指導要領の「ことばに関する事項」よりも重みを持たせてあることを確認しておく。

「国語Ⅰ」の「言語事項」の内容としては、文章・文の組み立てや語句のはたらき、国語の表記の仕方、文語文法、漢文訓読法、語彙に関することがら、漢字の読み書き、言語の役割、国語の特質といった項目が示されている。これは、中学校のそれと比べて、かなり簡単な記述となっている。しかし、「3内容の取扱い」の(3)アに「中学校の指導の上に立つて、内容のA及びBの指導の中で深めるようにすること。」とあり、指導要領の記述が簡単であるから中学校よりも軽視しているというのではなく、すべてにわたってより深く（ということは詳しく）指導することを求めているのである。

以上の観点から、現在出版されている教科書を比較しつつ、「言語事項」に関する記述の問題点を指摘する。

一 対象教科書と考察方法

現在高等学校で使用されている「国語Ⅰ・Ⅱ」教科書は、十三社十八種である。考察の対象は一社一種とし、入手

できなかった学校図書を除く左記の十二社十二種を採り上げた。一社で二種出している場合は、稿者の判断でスタンダードな方、「言語事項」に関する叙述の多い方を採用することにした。下に記したのは略称である。

旺文社『高等学校国語Ⅰ』〔改訂版〕	旺文
旺文社『高等学校国語Ⅱ』〔改訂版〕	旺文Ⅱ
角川書店『高等学校総合国語Ⅰ』〔改訂版〕	角川Ⅰ
角川書店『高等学校総合国語Ⅱ』〔改訂版〕	角川Ⅱ
教育出版『新訂国語Ⅰ』	教出Ⅰ
教育出版『新訂国語Ⅱ』	教出Ⅱ
三省堂『新国語Ⅰ』	三省Ⅰ
三省堂『新国語Ⅱ』	三省Ⅱ
尚学図書『高等学校国語Ⅰ』新訂版	尚学Ⅰ
尚学図書『高等学校国語Ⅱ』	尚学Ⅱ
第一学習社『高等学校新国語Ⅰ』二訂版	第一Ⅰ
第一学習社『高等学校新国語Ⅱ』二訂版	第一Ⅱ
大修館『高等学校国語Ⅰ』改訂版	大修Ⅰ
大修館『高等学校国語Ⅱ』改訂版	大修Ⅱ
筑摩書房『高等学校用国語Ⅰ』改訂版	筑摩Ⅰ
筑摩書房『高等学校用国語Ⅱ』改訂版	筑摩Ⅱ

東京書籍『改訂国語Ⅰ』	東書Ⅰ
東京書籍『改訂国語Ⅱ』	東書Ⅱ
光村図書出版『国語Ⅰ』改訂版	光村Ⅰ
光村図書出版『国語Ⅱ』改訂版	光村Ⅱ
明治書院『基本国語Ⅰ』新修版	明治Ⅰ
明治書院『基本国語Ⅱ』新修版	明治Ⅱ
右文書院『高等学校国語Ⅰ』改訂版	右文Ⅰ
右文書院『高等学校国語Ⅱ』改訂版	右文Ⅱ

右の十二種の昭和六十一年度使用版（尚学Ⅱのみ旧版）を対象とし、〔言語事項〕に関する記述を、私に分けた項目別に比較検討し、問題点を指摘し、改善のための提言をする。項目は、音声と音韻、文字、文法、語彙、言語一般（付、言葉に関する読み物）という分野に大別し、それぞれをさらに細分して設定し、一覧表とした。各項目の数値は、各社の「国語Ⅰ」「国語Ⅱ」の教科書において、その項目に関する叙述に何頁をあてているかを示す。Ⅰ・Ⅱ別々に示すのが本意であるが、スペースの関係上、Ⅰ・Ⅱの合計で示した。小数二位の数字で示してあるが、小数部分は36を分母とする分子の数値を示している。例えば、 0.05 は36分の5頁、 1.16 は1と36分の16頁のスペースを用いているという意味を表す。これは、各教科書とも、教材本文は通常一六行一段組み（頭注または脚注のある場合もある）であるのに対して、学習・学習の手引き・言葉の学習・ことばの研究などの呼称で本文の後に設けた課題は、多くの場合十八行二段組みになっているので、その一行を36分の1頁として計算したためである。十八行一段組みの場合は一行を36分の2頁として計算し、約分せずすべて分母を36とし、分子の数値を小数として示したものである。

数値の示し方を簡便化した以外は（注1）の拙稿と同じ要領で算出した。空欄は、その社の教科書にその項目に該当する叙述がないことを意味する。

なお誤解を避けるために付記しておくが、教科書を探り上げたこの種の論考は、多くの場合A社B社などと記しているが、稿者はあえて出版社名を明記した。それは、現行教科書の実態を公正かつ客観的に見て、先入観や恣意的操作を排除した統計と論述であることの証のつもりである。

二 音声と音韻

この分野については各社ともまったく軽視していると言わねばならない。中学校の教科書も他の分野と比べて取り扱いが不十分であったが、高校の場合はまさに“お話にならない”の一語に尽きる。それで、この分野については表の作成をとりやめ、文章で実態を述べる。

まず、日本語の音節の種類については、角川Ⅰ三九頁に五十音図を掲げている。これは仮名遣いと活用の理解のためと称しているが、清音の音節一覧という観点でカウントした。次に、教出Ⅰは五九頁にいろは歌、六〇頁に五十音図を掲げ“音韻体系表”という位置づけをさせている。他には、三省Ⅰ三一頁に付録の一つとして五十音図（仮名の字母も）を掲げているのみである。このような状態であるから、日本語の音節を直音と拗音とに分け、ともに清音・濁音・半濁音に分けられるとか、日本語音節の特徴（開音節など）や単音（母音と子音）・音素・有声音と無声音、調音器官と調音方法についての記述がある教科書は皆無である。

音便は文法の範疇とすることになっているが、モーラ音素（h/n/r）の存在と母音脱落（促音便・撥音便）・

子音脱落（イ音便・ウ音便）といった音韻の面からの説明も、高校生なら理解できるし、むしろ言葉に興味を持つようになると思われる。脱落のほかに、転倒・交替・同化といった語音変化についても、語彙の面と関連づけながら採り上げるのがよいと思う。この項目に関連した課題を出しているのは、旺文Ⅰ一七六頁「言葉の学習」だけである。

二 例に倣って、次の傍線部をそれぞれもとの形に直せ。

《例》 あったんじやないか→あったのでは

「しといたら」 「買わなきゃいかん」「言っても」「だけど」

この課題では、単に言い替えてオシマイでは小学校の授業である。語音変化の法則にあてはめて教師が解説するか、先に教師が法則を説明しておき、生徒に課題の場合がそれぞれの法則による変化かを説明させるか、いずれかの方法をとるべきであろう。教科書の編纂者がどのような扱いを期待しているのか、教授資料を見ていないのではつきりしないが、稿者は語音変化の指導の場としてほしい気がする。それにしても、語音変化についての説明がどの教科書にも全く載っていないのは、どうしたことであろうか。日常なにげなく使っている「さざんか」「あたらしい」といった語が、転倒という語音変化によって生まれたと知らされると、生徒は「もつと言葉について知りたい」と思うのではないだろうか。

連濁・連声について触れている教科書も皆無である。音韻変化の歴史の面では、右文Ⅱで、橋本進吉「駒のいななき」を採り、「学習」で、「ハ行子音の変遷について、時代別に整理してみよう」とあるのが唯一である。各教科書とも、古文入門のところで、古文の「思ふ」は「オモウ」と読むといった説明はしているが、それはなぜかといった点についてまで突っ込んでいるものはほとんどない。上代特殊仮名遣いやヤ行のエがいつごろからなくなったかなどということまで高校生に知らしめよとは言わない。古文を読む場合にどうしても必要な、ハ行子音における「唇音退化

の現象」と「ハ行転呼音」については、少なくとも一年生用の教科書に記述がほしい。

なぜならば、このことは現代人が古典を読む場合の基本姿勢に関ってくるからである。すなわち、我々は古語・歴史的仮名遣いで書かれた古典を、現代の音韻で読むことを暗黙のうちに共通了解事項としていたのである。もしそうでなければ、十数年前に金田一春彦先生がコロンビアレコードからお出しになった『平安朝日本語復元による朗読源氏物語』のように、「スマニファイトンドコロドウクシユイノアカジエニ」と読まねばならなくなってしまう。「けふ」は「キョー」、「なほし」は「ノーシ」、「けうら」は「キョーラ」と読む（発音する）といった一種の約束事によって、我々は古典を読んでいるのであるから、その約束事によってきたる根柢を、生徒の理解度に応じて教えていかなければ、いつまでたっても「古典はおもしろくない」という生徒の気持を払拭できないであろう。「読みクセなのだから、こう読みなさい」と結果だけを押しつけられる、生徒（特に理科系の）にとって、こんないやなことはないのである。理科系の生徒にも古典に興味を持たせるためには、「こうだからこうなる」という因果関係の説明をもっと採り入れなければならない。以上の観点から言って、現在の教科書の、「語音変化」「音韻変化」に関する記述の貧困さは、国語教育についての基本姿勢に関する重大問題であるように思う。

次に、アクセント・イントネーション・プロミネンスといった項目については、右文Ⅰの「表現」に関する叙述の中で、「話しことばの特性」の一つとしてふれているのみである。「表現」は、今回の指導要領の改訂で特に重視された事項で、各教科書ともかなりのページを割いているが、ほとんど作文に関する記述で、「話し方」の方はネグレクトしている会社がほとんどである。（就職試験の面接で、このごろの高校生は言葉遣いになっていないと言われるのは、ここに原因の一端があるか。）ともあれ、稿者は「言語事項」に関することがらは、総花的に何んでもかんでもすべて高校教科書に記述せよと主張しているのではない。アクセント・イントネーション・プロミネンスなどは、中学校

(または小学校)で教えれば、高等学校では特に採り上げなくてもよいと思う。要は、各項目の割り振りをうまく行うべきであると言いたいのである。そのために、各教科書会社が共通のテーブルに着いて、共通理解と共同歩調をとることができれば、小・中・高を見通した国語教育の能率化が図られるであろうと思うのである。ただし、指導要領や通達などの形で文部省からあまりに細かい指示をするのは、却ってマイナスである。

三 文字と表記

表Ⅰには、あえて横列が全部空欄となる項目(すべての教科書が触れていない項目)をも掲げた。これらの項目は、文字についての知識を得させるための順序・段階として、ぜひ触れてほしいと思う項目だからである。

文字には、形・意・義の三要素があり、漢字はこの三要素を具えた文字で、殷墟から発掘された甲骨に書かれた文字が最も古い字形である、などといった説明は、ほとんどスペースを取らないと思うのに、なぜかどの教科書もこの点の叙述は欠くのである。これは中学校で既習のことと考えているのなら、大きな誤りで、教出・学図以外は全く言及していないわけであるから、ぜひ「公理に溯^{さか}って」という姿勢で叙述にあたってもらいたい。

六書、部首、呉音・漢音・唐音といった漢字の基礎知識は、中学校で学習済みとみなしているようで、右文Ⅰ二九頁に「漢字について」として六書など漢字の基礎的事項を一頁半にまとめているのと、旺文Ⅱ一一六頁に、

二 次の傍線のついている漢字の「^{つづ}旁」をもつ漢字をできるだけ多くあげてみよう。

1 復^ふ讐^{しう} 2 一滴^{いつてつ} 三 日本語

とあるのがめだつぐらいで、他はほとんど触れていない。教出Ⅰ九〇頁に、「日本語の特色③ 漢字と仮名」という

表Ⅰ 文字と表記

(小数は、分母を36とする分子の数値)

項 目	旺 文	角 川	教 出	三 省	尚 学	第 一	大 修	筑 摩	東 書	光 村	明 治	右 文
文字の本質(形・音・義)												
世 界 の 文 字												
漢字の歴史, 字体												
六書, 部首(偏旁冠脚)	0.05								0.07			1.14
漢字の音と訓		0.02	0.30	0.04					0.28		0.03	0.14
呉音・漢音・唐音			0.20									
熟字訓, 難読漢字の読み方	0.04		0.27						0.06			
同音(訓)異字の使い分け		0.02	0.18			1.00	0.06		0.05	0.37		0.04
同字異訓(音)の使い分け			0.10			0.05			0.07	1.20		
多義的な漢字(ex悪魔, 嫌悪)	0.12		0.12						0.06	0.08	0.07	
字形の似た漢字の読みと意味の違い		0.04	0.26						0.20	0.18		
熟語の誤字訂正			0.06									
万葉仮名(真仮名)			0.07									
平 仮 名(草仮名)			0.22				0.07					
片 仮 名(含, オコト点)	0.03		0.26				0.02					
ロ ー マ 字							0.01					
仮名遣い(現代・歴史的)	0.14	0.06	0.22	0.28	0.06	0.20	1.08		0.21	0.27	0.02	0.09
書 き 取 り					1.29	1.05			5.26	0.18		
読 み 仮 名					1.00	0.07			0.12	0.05	0.06	
漢字の字義と寓意				0.02								
漢字の慣用読み										1.00		
漢字表記の揺れ										1.00		
漢語の読み方の揺れ										1.00		
小 計	1.02	0.14	6.10	0.34	2.35	3.01	1.24	0	8.30	7.25	0.18	2.05

三頁の読みもの（無記名）を載せ、二〇行ほどで呉音・漢音、唐音について説明しているが、こうした配慮は、中学校での既修知識の復習整理の上に立って高校での学習を積み上げていくという点から有効であろう。

漢字の用法に関しては、三省・筑摩を除いて、各社それぞれ意を用いている。特に教出・光村・東書という中学校教科書を出版している社のものにキメ細かい配慮が見られる。たとえば、東書は各教材の後の〔学習の手引き〕に続き、〔漢字〕というコーナーを設け、単なる書き取り、読み仮名づけの他に、対応する熟語、同字異音（訓）の使い分け（例―漁業・不漁、極限・至極）、字形の似た文字の読み・意味の違い（例―環境・生還、衝突・均衡）、多義的な文字（例―優雅・優劣、周囲・周到）などさまざまなパターンの問題を用意している。教出は、各教材の後に〔言葉の学習〕というコーナーを設定し、教材中に訓読みで出てきた漢字を掲げて、音を確かめその音を使った熟語を作らせる（例―覆う、仰ぐ）、逆に「次の熟語について〇印の漢字の訓を調べよう」（例―一瞬、効果）、同音異字の使い方（例―体験、検査、危険、儉約）、宛字の訂正（不仕末、待久力、黙否権）、など。光村は、各教材の後の〔研究〕に続けて〔漢字の練習〕というコーナーを設けている。◇次の漢字の読み方に注意しよう（例―供給・供養・供える・子供）、◇次の熟語の構成を調べそれぞれと同じ構成の四字の熟語を探してみよう（例―喜怒哀楽、生活環境）、◇次に挙げる語の対義語を挙げてみよう（例―雑然、広義、深層）などバラエティに富んだ課題を提示している。

高校生になると、中学生の時ほど漢字学習を熱心にしなくなる傾向があるが、単なる書き取り練習よりも右に挙げた三社のような工夫をすれば、高校生の漢字力をさらに高めることができるであろう。

その他、漢字についての読み物では、光村Ⅱ一八頁「漢字表記の揺れ」（例―成長・生長、情況・状況）、同二三〇頁「漢語の読み方の揺れ」（例―重複をジュウフクともチョウフクとも読む）が、言語の生きた姿を捉えていて興味深い。本来の（正しい）用字・読み方を提示せずに、揺れの現象を肯定的に追認したような書きぶりには疑問を懷

く。たとえば、発足を「ハッソク」と読むことをも容認するのはいかがかと思われる。

表記の面では、古典入門のところで、現代仮名遣いとは異なる歴史的仮名遣いについて説明しているが、既して簡略にすぎ、筑摩に至っては全く触れていない。教師が説明するのが当然ではあるが、そして中学校でいくらか学習してきているとはいえ、高校ではじめて古典を学習する単元において、歴史的仮名遣いの基本法則をまとめた形で記述しておくことが、以後の古典学習をスムーズにすることにつながるものと思う。教科書編纂者は、教科書には書かないが、この事は現場で教師が補ってくれるであろうなどという期待を前提として教科書を作るべきではない。生徒にとって必要な知識は、すべて記述するつもりで臨んでほしいものである。

漢文学習と結びつけて、漢字学習を深める方途も、もっと工夫されてよい。三省Ⅱ一〇二頁〔学習〕で、莊子の文章に出てきた「渾沌」「條」「忽」の字義を辞書で調べ、これらの名にどのような寓意が込められているか考えてみよう、という課題などは、漢字学習と内容理解とを結びつけたよい問題であると思う。

次に、表記について気づいたことを問題点として提起する。それは、筑摩Ⅱ二三三頁、近藤芳美氏「無名者の歌」の中での、

思慕告げず別れ来し吾を潔しと思えど湧き出ずる悲しみに泣く

田中まり子

という歌の仮名遣いである。一般に、口語文は現代仮名遣い、文語文は歴史的仮名遣いで表記することとなっている。ところが、この歌は、言葉遣いは文語文なのに現代仮名遣いとなっており、まことに奇妙な表現なのである。稿者なら「思へど」「出づる」と訂正して掲載するつもりであるが、近藤氏に何か確たる信念でもおありになってのことであらうか。朝日歌壇なら、こうした表現も大目に見ることができようが、規範を示す国語教科書に、何の説明もなく、誤った仮名遣いの歌を載せることは、許されないと思うのである。他の教科書に載っている近藤氏自身の短歌は、す

べて正しい歴史的仮名遣いとなっている。この部分を早急に訂正されるよう希望しておく。

四 文 法

古典学習の意義を示すことを兼ねて、口語と違う文語の特質について何らかの叙述をしているのは、旺文・三省・尚学・第一・右文である（教出は少し方向が異なる）。やはり高校ではじめて古典の単元に入る時には、中学校での古典学習とは一段違った角度からあらためて入門するという「襟を正した」姿勢が教科書の叙述にもほしい。（角川は山田俊雄氏の古典を学ぶ意義を述べた文章を載せている。）

用言の活用以下については、表Ⅱの通りで、あまり問題もないのであるが、学習指導要領に「イ文語のきまり、訓読のきまりについては、文章の読解に即して行う程度とすること。」とあることと、教科書の記述のし方との関係をどう捉えるかという点は、もっと追求されてよい問題だと思う。すなわち、教材の解釈に必要な文法知識をその都度、断片的に教授していけばよいのか、それともある程度系統立てて教えるのかという問題である。体系の中に位置づけられない断片的な文法知識では、応用力もつかないし、実際に古典作品を読む場合に役に立たないのではなからうか。中学校学習指導要領で、「第3の4 第2の各学年の内容の〔言語事項〕については、A（表現）及びB（理解）の指導を通して身につけさせるとともに、ある程度まとまった知識を得させるための指導もできるように配慮する必要がある。」（傍線稿者）とあったのに、高校の「国語Ⅰ・Ⅱ」ではどうして消えてしまったのだろうか。（選択科目の「古典」にはある。）中学校で口語文法をある程度体系づけて教えておき、高校一年生で口語文法の体系にあてはめる形で、文語文法を教えていけば、さしたる困難なく体系的な文法知識として生徒の頭の中に定着すると思うのである。その

表Ⅱ 文 法 (小数は、分母を36とする分子の数値)

項 目	旺 文	角 川	教 出	三 省	尚 学	第 一	大 修	筑 摩	東 書	光 村	明 治	右 文
文語と口語の違い(概括的説明)	0.22		0.15	1.00	1.12	1.10						0.14
用言の活用(種類と活用形)	1.12		1.04	1.00		1.14	2.28	0.10	2.12	1.24	0.11	0.10
活用形の用法	0.02							0.04				0.13
助 動 詞	1.21	0.11	1.16	3.03	0.24	3.14	4.26	0.12	6.12	3.04	0.14	0.12
助 詞	1.11	0.17	0.14	2.02		3.00	3.19	0.11	1.32	0.20	0.07	0.28
係 り 結 び	1.07	0.10	0.26	0.09	0.11		1.22		0.20	2.35	0.02	0.32
敬 語	0.33	0.17	2.25	3.00	0.13		3.02	1.07	2.34	5.14	0.35	0.28
音 便	0.05	0.03	0.02	0.29		0.03		0.04				0.16
文の構造(係り受け)	2.14		0.06				1.18		0.02		0.04	
主 体 (動作主)	0.05	0.06	0.12				0.14					
接続詞(接続語句)		0.09			0.04	0.05						
副 詞		0.04	0.12		0.03	0.04			0.03		0.09	
句法(条件表現, 否定, 受身, 反語etc)	0.29					0.12					0.04	
品詞の識別(文法上の説明)	0.07	0.22	0.08						0.09		0.03	1.04
品 詞 の 転 成											0.02	
文法知識を応用して現代語訳	0.15					0.08			0.22		0.22	1.02
敬語表現と距離感						0.06						
小 計	11.03	2.27	7.32	11.07	2.31	10.04	17.21	2.12	15.02	13.25	3.05	6.15

場合、あまり重箱の隅を突、つくような指導を慎まねばならぬことは言うまでもない。そこで、対象とした十二種の国語Ⅰの教科書に「品詞一覧」（単語を自立語と付属語に分けそれぞれ活用の有無で分けて云々、品詞分類表とも）が本文中でも付録にでも掲載されているかどうかを調べてみると、角川・教出・三省・第一・大修の五社のみが載せており掲載率四二％である。「品詞一覧」一つだけで判断するのは早計にすぎないかも知れないが、編纂者の文法の体系的指導に対する姿勢が象徴されている気がする。

文法に関する記述で見出した問題点の一つは、教出Ⅰ七四頁、古文の敬語を尊敬・謙讓・丁寧の三種類に分けて、説明しているところである。必要部分を引用する。

(2) 謙讓 自分側の謙遜する気持ちを表すための表現。話題の人に及んでゆくこちらの動作・事柄などを低めるために謙讓語を用いる。(傍線稿者)

「低める」のが目的であるとする説明は誤解を招きやすいと言わねばなるまい。「低める」表現するのは話者・筆者の手段であって、動作・作用の対象(受け手)に対する敬意を表すためとしなければならぬところである。叙述の変更を希望する。

次に東書Ⅱ一三九頁の尊敬表現の例として、『源氏物語』『大鏡』から挙げた用例の中に、「御(御時) 御(御とぶらひなど) 御(御髪) ……」とあるが、平安時代における「御」の読みとして「おん」は存在しなかったという榊原邦彦氏の説が学界に認められてきた今日では、「御」は除いた方がよいと思われる。また、榊原氏によれば「御髪」も「おほむくし」と読んだ可能性が高いとのことで、例を御几帳や御簾に代えた方がよさそうである。

なお、筑摩のように、脚注の中に混じえた形で、文法に関する小問を適宜入れてあるものは、表Ⅱの数値にカウントしていないことをおこわりしておく。

五 語 彙

学習指導要領には「ウ 語句の意味、用法などを理解し、語彙を豊かにすること。」と示され、文部省の解説書には、^(注)「語句には、単語・熟語・慣用語・連語及び成句などが含まれる。まず、語句の意味であるが、語句の中にはその意味が単一ではなく、広がりをもっていて、中心的、一般的意味のほかに、その周辺に幾つかの派生的、あるいは特殊の意味を含んでいるものも多い。そのような意味の広がり学ばせるとともに、実際に文を読んだり書いたりする際に、語句の意味を的確にとらえ、文脈との関連において適切に選ぶように注意させる。また、語句は、文脈の中でその語感やニュアンスなどが、表現上に特別な効果を生み出すこともあるから、意味の理解に加えてそういう面への関心も育てるようにしたい。(以下略)」と記されており、こうした文部省側の意向と指導に沿う中で、各社ごとに創意工夫をこらして、教科書は作られるのである。

表Ⅲによつて、右のような趣意で作られた各社の努力の跡を一覧してみよう。まず、語彙について最も多くの頁を割いている光村と最も少ない叙述しかしていない筑摩とは実に五九倍という差になっている。もつとも、筑摩の場合脚注の中に問いの形で入っている語義を尋ねる問題をカウントしていないのもう少しは接近するが、それにしてもひどすぎるといふ感拭えない。その他、尚学・角川などは語彙指導についてどのような考えを持って編集したのか、編集責任者に考え方を説明してもらいたいと思うくらいである。今回の指導要領の改訂の際、強化する重要項目の一つとして語彙指導を挙げていた文部省が、よく筑摩の教科書の検定を通したものだとも思う。

このように書くと、どこかから、「語彙に関する解説文や設問がなければ、語彙指導はなしえないのか、そんなは

表Ⅲ 語 彙

(小数は、分母を36とする分子の数値)

項 目	旺 文	角 川	教 出	三 省	尚 学	第 一	大 修	筑 摩	東 書	光 村	明 治	右 文
和語・漢語・外来語・混種語	1.18			4.00		0.03	0.24			5.00		0.08
古語と現代語	0.14		0.18	0.03	0.11	0.21	0.08	0.08	0.18	5.33	2.31	1.09
語源・語構成	0.11					0.02	0.04			0.04	0.11	0.05
接頭辞、接尾辞	0.18		0.14			0.07			0.05	0.06	0.25	0.04
熟語の構成	0.34	0.12	1.00	0.19		0.31	0.02		0.07	0.04	0.12	
同音異義の漢語	0.04		0.18							1.10	0.03	
慣用句、慣用的な言いまわし	0.07	0.24	0.30			0.33	0.10		0.03		1.05	0.14
故事、成語、諺、箴言	0.07		2.22	0.12	0.06	0.01	0.12		0.07	0.04	0.13	0.03
対義語						0.05	0.04		0.09	0.10	0.06	0.06
語句の意味(含、別の語に言い替える)	0.16	0.31	1.29		1.09	0.31	0.12		0.35		2.32	1.11
語感	0.18											
特定の意味を表す語(親族、色など)	0.07					0.09					0.15	0.04
新語の造語法、生活と言葉	0.12		2.00									
擬声語・擬態語	0.15	0.02	1.02	0.02		0.10	0.10		0.03		0.05	
数詞、助数詞	0.04		0.02									0.04
複合サ変動詞	0.09		0.02									
語源俗解と漢字										0.26		
俗語											0.04	
各自のことばで定義する						0.03						
手紙の用語						0.04						
小 計	6.14	1.33	10.29	5.00	1.26	4.16	2.14	0.08	2.15	13.25	9.18	3.32

ずはない。言葉を用いて綴った文章を教材とする限りいつでもどこでも語彙指導はできる。」という反論の声が聞こえてきそうである。しかし、前述のように、教科書は教科書としての完全性を目指すべきで、副教材や受験参考書や教師に補ってもらうことを期待して編纂すべきではないのである。とりわけ、国語という教科は、指導の難しいこと英語・数学に三倍すると言われるように、教師になって五年くらいたって、やっと一人前の授業が出来るようになるのが普通である。したがって、「教科書で教えるのであって、教科書を教えるのではない」と自信を持って言える国語教師は、六十パーセントくらいはいないのではなからうかと思うのである。もちろん、新任の先生で熱心に教材研究をし大きな成果を上げていらっしゃる方のあることを十分承知した上で、なおかつ国語教育の深遠さを思う時、教科書とそれに付随する教授用資料（指導書）の重要性を強調したいのである。

さて、語彙に関する項目を順に見ていくことにする。まず、日本語の語彙を出自から、我が国本来の言葉（和語）と漢語・外来語・それらの混種語とに分けることを述べている教科書が過半数で、大変良いことだと思う。特に三省Ⅰ六〇頁「ことばの研究② 和語と漢語」同Ⅱ八三頁「ことばの研究② 外来語」では、各二頁を使って、それぞれの語の特徴や用いられ方を説明して出色である。また、光村Ⅱ九八―一〇二頁は、「古典と現代語（一）漢語の役割」と題して、漢文および和文における漢語の比率等を具体的数値を上げて示すなど、やや専門的な記述で読みごたえがある。大修Ⅰ二八頁の説明や教出Ⅰ二八頁の外来語と訳語もよい。他は、漢語を主とした設問である。「古語と現代語」については、古典入門において不可欠で、角川Ⅰ四六頁「なぜ古典を学ぶのか 山田俊雄」の文章中で古語に触れているので、すべての教科書において何らかの記述があるということになる。

中学校教科書で貧弱であった、語源・語構成・造語法に関する叙述が、かなり多く見られるのは嬉しいことである。まず、第一Ⅰに岩淵悦太郎氏著『語源の楽しみ』を採っているのは特筆したい。設問では、主として漢語の構成（例

―旺文Ⅰ二六一頁、白砂・外泊のように上の字が下の字を修飾しているもの、習字・辞職のように上の字が動作を下の字がその対象を表しているもの、云々〕に関する記述が主であるが、明治Ⅰ二三九頁「語句の学習 a『いにしへ』は、語源的にみると、三つの語から成ると考えられる。そのうち、「へ」は「方」の意の名詞である。他の二つの語の品詞と意味とを考えてみよう。」といった設問や、大修Ⅱ二六六頁「学習の手引Ⅱ『いたはし』のほかに『いた』を語素としている語を文中より抜き出せ」という設問など、語構成要素に分析する考え方が取り入れられたのは良い傾向である。

また、旺文Ⅰで、金田一春彦先生の「太郎と花子——日本語の造語法——」という文章を掲げ、〔学習〕で日本語の語句の作り方の特徴をまとめさせたり、教出Ⅱ一三七頁で生活の中から生まれてくる言葉についての説明文を載せているのも良いし、三省Ⅱ一九五頁に新語の造語法を説明しているのも評価できる。また、光村Ⅰ一七六頁の「言葉と漢字 3 語源俗解と漢字」もおもしろい読み物である。一所懸命が一生懸命と語形も用字も変わってしまった説明などは、生徒に興味を喚起するものと思う。

その他の項目では、中学校と比べて慣用句や故事成語に関する記述が多くなっている感じがする。旺文Ⅰ四二頁は「語感」という項目としたが、「二次の傍線部を括弧の中のように書き換えたら、どのように意味や感じが違うか。

1 ヽ認識することができないからだ。(できない)……以下略……」という設問である。

新しい試みとして評価したいのは、第一Ⅰ二二七頁(ことばの研究)「二 身辺のものとよく観察して、それらを各自のことばで定義し、それを辞典の記述と比較してみよう」と明治Ⅱ二四九頁の「語句と学習」「a 芭蕉は、『俳諧の益は俗語を正すなり。』(三冊子)と言ったと言われる。ここにあげた三人の句の中から、芭蕉が言う『俗語』と考えられる単語を指摘してみよう。」といった記述である。

表Ⅳ 言語一般

(小数は、分母を36とする分子の数値)

項 目		旺 文	角 川	教 出	三 省	尚 学	第 一	大 修	筑 摩	東 書	光 村	明 治	右 文
文体（文章の特徴）		0.26	0.04	1.00	0.16			0.10	0.04		5.05	1.12	0.10
文末の表現とニュアンス		0.12						2.02	0.02	0.02		0.15	0.08
文語調，鱧訳調，漢文調		0.06					0.01	0.08			5.00		
話し言葉の特色		0.07			5.00		0.10	2.00					1.04
話し方，言葉遣い				0.02		0.07						0.10	
比喩，擬人法，寓意		0.05		1.03		0.05	0.12	0.32		0.24	0.10	0.24	0.26
対 句			0.01	0.11	0.16	0.02	0.01	1.18	0.04	0.01		0.02	0.12
枕詞・序詞・掛詞・縁語		0.19	0.04	2.12	2.04	0.11	0.004	2.16	1.04	0.12	0.30	0.14	0.12
その他の修辭(倒置, 体言止, 本歌取, 等)			0.01	0.02	0.02	0.02	0.02						0.06
季 語 と 季 節		0.05	0.01	0.02	0.01	0.03	0.02	0.02	0.18	0.02	0.06	0.02	0.06
切 れ 字		0.02	0.02		0.01		0.02		1.00	0.03	0.04		0.03
短歌の句切れ		0.01	0.03	0.04	0.04		0.004	0.04	0.05	0.05	0.01		
詩の韻律(リズム)とイメージ					5.00	0.02			1.22		0.02		
表現の特色・効果				1.00	0.08	0.01	0.04						
論 理					3.00								
共通語と方言				2.00	2.00		0.05			0.03			0.02
日本語の特色(除，読み物)				1.00					0.18				
言葉あそび，パロディー					14.02								
言 葉 の 混 淆											1.00		
世界の中の日本語				1.00									
小 計		2.11	0.16	10.00	32.18	0.33	1.04	9.20	5.05	1.16	12.22	3.07	3.17
言 葉 に 関 する 読 み 物	鈴 木 孝 夫	10			9			11		6	11		11
	外山滋比古									5	11	10	4
	金田一春彦	6						8				7	
	川 本 茂 雄	11			7								
	岩淵悦太郎						7						10
	阪 倉 篤 義							12	7				
	そ の 他	12, 13	8, 8, 5	7, 9, 8, 11	9, 9, 8		6	10	10, 9 11	6	3, 5		8, 8, 4
	小 計	52	21	35	42	0	13	41	37	17	30	17	45

位相語については、方言（地域的位相語）以外各社とも全く採り上げていないが、流行語やギャグを好む現代高校生に、歴史的観点から説き起こした語彙の位相に関する記述を掲載し、ギャグの出来方のパターンや背景となる世相についても知らしめ、考えさせるのも有効ではないかと思う。

六 言語一般

表Ⅳは、音韻・文字・文法・語彙・漢文訓読関係以外の項目を掲げたものである。

和歌の句切れ・七五調五七調や枕詞・序詞・掛詞・縁語、体言止、本歌取りといったレトリック、俳句・俳諧の季語や切れ字については、ほとんどの会社の教科書が何らかの記述をしている。

次に、各社の工夫で目立つものを紹介する。まず、大修Ⅱ八三頁「言葉と表現（2）話し言葉の特色」は、二頁にわたって書き言葉とは異なる話し言葉の特徴を要領よくまとめている。三省Ⅱ一三六頁も「話しことばの特徴」と題して、結婚披露宴のスピーチなどを例にとりながら興味深い説明となっている。

詩の韻律・イメージの項目では、筑摩Ⅰ一三八頁に「詩のリズムとイメージ」と題する一頁の解説を掲げているのと、三省Ⅱ八五―八九頁の、「ことばの研究② イメージ」と題する読み物は、詩歌を鑑賞する場合と作る場合の両方に役立つ記述である。三省Ⅱ四八頁「ことばの研究① 逆説・パロディ」や同一九七頁「ことばの研究④ 論理」も興味深い読み物である。また、教出Ⅰ二九頁「日本語の特色① 世界の中の日本語」は、十二種類の教科書中唯一の世界的視野に立つ解説文で、各社も採用してほしい内容である。光村Ⅰ二二五頁「言葉と漢字4 言葉の混淆」は、「（紙を）ヤブク」という動詞が「ヤブル」と「サク」の入り混じってできたものであるとの説明から、現代語にみ

表V 漢文関係、付録

(小数は、分母を36とする分子の数値)

項 目		旺 文	角 川	教 出	三 省	尚 学	第 一	大 修	筑 摩	東 書	光 村	明 治	右 文
訓読の基礎(訓点)		2.18	5.00	3.02	2.00	3.18	5.00	1.04	1.00	1.18	2.08	0.26	2.08
基 本 文 型		0.18	1.00				0.12	1.06	0.06				
再 読 文 字		0.06		1.09	0.17	0.15	1.00	0.20	0.18	0.26	0.28	0.05	0.30
句 法 ・ 句 型		1.02	3.23	0.14	0.02	0.08		1.18	0.22	0.28			0.12
返 読 文 字				1.00	0.20	1.12	1.00		0.07		0.18		1.02
助字(置字)の用法			0.22	0.31	0.29	0.08	1.00	2.03			0.18	0.09	0.24
漢詩の種類と決まり			0.23	2.08	2.20	0.02	2.00	0.28	2.00		0.04		0.02
漢文の誇張表現		0.03											
小 計		4.11	10.32	8.28	6.16	5.27	10.12	7.07	4.17	3.00	4.04	1.04	5.06
合 計 (読み物は除く)		25.05	16.14	51.29	56.03	14.08	29.01	38.14	12.06	30.27	51.29	17.16	21.03
付 録 (上段が国語Ⅰ、下段が国語Ⅱ)	常用漢字一覧(含付表)	14 0	18 18	17 16	9 0	12 12	0 ※1	19 19	18 0	16 16	8 8	14 14	15 15
	文法一覧(活用表等)	4 7	13 7	13 10	6 4	6 6	10 4	7 7	6 7	6 6	6 6	8 8	7 7
	漢文基本句型	2 4			4 0		0 2		0 2	2 3	2 2		
	仮名遣い対照表				2 0	2 0	2 1						
	日本語の変遷				0 6								
	漢詩の決まり					2 0							
	主要語句一覧						4 3			4 4		3 3	
	古今異義語						1 3						
	故事成語一覧						4 0						
	慣用句、諺						4 0						
	送り仮名のつけ方						2 1						
	符号の使い方						2 2						
	原稿用紙の使い方									2 0			2 0
	手紙の書き方									2 0			
小 計		31	56	56	25	40	46	52	33	61	32	50	46
総計(読み物・付録を含む)		108 .05	93 .14	134 .27	123 .03	54 .08	88 .01	131 .14	82 .06	108 .27	113 .29	84 .16	112 .03

※＝主要常用漢字新旧対照表

られる混淆による誤用について述べており、興味深い。

以上、特に目についたものを取り出して述べたが、その他にも工夫の跡の窺われるものはある。

ここで一つの疑問として提出しておきたいのは、光村Ⅰ—一九頁に「掛詞・序詞・枕詞」^{かけことば}とある「序詞」の読み方である。他の教科書はすべて「じよことば」とあるので、重箱読みになることを気にせず一般的な方に合わせてもらいたいと思うが如何であろうか。

表Ⅳの下段の「言葉に関する読みもの」については、詳述するスペースがなくなつたが、なぜ尚学が一編も掲載しないのか不思議だということだけ述べておく。その他、にまとめた人は、大岡信、松村明、井上靖、河盛好蔵、扇谷正造、国分一太郎、井上ひさし、福原麟太郎、臼井吉見、竹西寛子、橋本進吉、中村明、吉川泰雄、坂元元、山本正秀、西江雅之、阿部昭といった人たちである。

むすび

表Ⅴには、漢文訓読関係と「付録」のうちの「言語事項」に関する項目を頁数で示した。折り込みになっているものも、通常のページの大きさに換算した。

漢文については素人なので、コメントはさし控えたいが、一点だけ、訓点法は基本文型と結びつけて示した方がよいのではないかと述べておく。

さて、以上述べて来たことをまとめてみると、国語Ⅰ・Ⅱの教科書は、「言語事項」に関する記述では、出版社によって大きな差があることがわかったこと。全般的に見て、文字と文法・漢文に関する叙述は大むね良好であるが、音韻

については全くおそまつで、語彙については差が大きいということに尽きよう。

国語科教育を良くする近道は、教科書を良くすることである。本稿が、各教科書の編纂者にいささかでも刺激となれば望外の喜びである。

注

- (1) 拙稿「中学校国語教科書における〔言語事項〕に関する問題点」(『椋山国文学』第十号、昭61・3)
- (2) 教科書は資料集、すなわち教材候補を集めたものであり、担当教員が授業で採り上げて初めて教材となる。
- (3) 注(1)の拙稿表Iを参照。
- (4) 榊原邦彦「平安時代の『御』について」(『名古屋大学国語国文学』第二四号、昭39・7)、『平安語彙論考』(教育センター、昭57・11)等。
- (5) 文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』(ぎょうせい、昭54・5)